帝京科学大学紀要 Vol.14（2018）pp.111-116

周手術期実習におけるICU・HCU看護実習を体験した学生の学びと看護観に関する研究

[1]石渡智恵美　[2]菱刈美和子

[1]帝京科学大学医療科学部看護学科
[2]元共立女子大学看護学部看護学科

Learning of ICU in a shuu operation period training and the student who experienced a HCU nursing training and study about a nursing view.

[1]Chiemi ISHIWATA　[2]Miwako HISHIKARI

キーワード：ICU・HCU看護実習、周手術期看護、看護観、看護学生

Ⅰ．はじめに

近年、医療現場は、年々高度化が進み、厚生労働省は、2014年医療施設（静態・動態）調査・病院報告の概況の中で、2014年10月1日現在、全国一般病院7426施設中特定集中治療室（以下ICU）が設置している施設は780施設とし、前回2011年度調査時点より病床数が＋22床と報告[1]され、病院自体が急性期化を呈している。

それに伴い看護基礎教育における実習現場でも、学生が受け持つ患者は既往歴等の複雑化・重症化の傾向がみられ、受け持ち患者のICUや高度治療室（以下、HCU）というICUと一般病棟の中間に位置する病棟で、ICUよりもやや重篤度の低い患者を受け入れる治療施設）の入室により、周手術期実習でのICU・HCU実習が求められる現状がある。その中で、臨地実習での看護の経験は、看護学生の看護実践能力の育成に大きく関与する[2]ことから実習内容の充実が大きな課題となっている。

そこで、ICU・HCUという場は特殊環境下であるが、実習期間の中で、看護技術経験が限られている今日の看護基礎教育での実習では、病棟で学ぶことが難しい人工呼吸器や透析等のME医療機器や特殊環境下における看護師の役割、また重症患者に対するチーム医療などを学習する場としての期待は大きい。これまで、ICU実習での先行研究では学びを示したものがいくつかみられた[3)4)5)6)7)]。また、筆者の先行研究でもICU・HCU実習体験は周手術期実習で一部の看護実践力を向上させるのに有効である可能性が示唆された[8)]。しかし、ICU・HCU実習経験が受け持ち患者へ活かされたことや看護観に関する研究はみられなかった。

Ⅱ．研究目的

本研究では、周手術期実習で、ICU・HCU実習を行った学生の学びと実習経験が受け持ち患者の看護や看護観へどのように影響を及ぼしたのかを明らかにし、今後の実習での教育方法の示唆を得る目的とする。

Ⅲ．用語の定義

看護観：学生の看護についての見方，考え方

Ⅳ．研究方法

1）研究対象者

研究対象者は、A短期大学看護学科3年生でICU・HCU実習後に同意が得られた学生。学生の属性は、平均年齢20歳、女性のみ。

2）データ収集

ICU・HCU実習を経験した学生に成績評価後、学びのレポート（無記名）を設置した回収ボックスへ提出するように依頼した。調査期間は2013年1月～3月であった。

3）学びのレポートの内容

（1）ICU・HCU実習で学んだことはどのようなものがありましたか。
（2）ICU・HCU実習を経験し、受け持ち患者の看護に活かせたことは何ですか。
（3）ICU・HCU実習での経験が、自身の看護観へ影響されたことはありましたか。

4）データ分析方法

分析方法は、「ICU・HCUで学んだこと」は学びのレポートの個々の記述を一文脈単位とし、看護の

学びに関する内容の意味のまとまりをコード化し、意味内容の類似性・相違性を比較検討しながら、抽象度を上げてサブカテゴリ、カテゴリ、さらにコアカテゴリを抽出した。質的研究でのコードはデータに則したラベルとし、サブカテゴリは同様の特徴をもつ中心概念、カテゴリとはサブカテゴリの類似した内容を集約したもの。コアカテゴリはカテゴリの意味内容を簡潔に表示した。データの分類には、信頼性を確認するために質的研究の経験をもつ研究者で分析し、結果の真実性を確保した。

「ICU・HCU 実習後に受け持ち患者の看護に活かせたこと」「ICU・HCU 実習経験が自身の看護観へ活かせたこと」は、学びのレポートの個々の記述の一文脈をそのまま記載した。

Ⅴ．実習内容

成人看護学実習Ⅰ（周手術期看護実習）

３年前期～後期〔３単位:135 時間〕

（1）実習目標

①周手術期・回復期にある対象・家族並びに関係者との援助関係を築くことができる。

②周手術期・回復期にある機能障害に着目し、フィジカルアセスメントができる。

③周手術期にある対象の発達課題、生活過程、健康状態（機能障害の程度・治療・予後）を相互に関連づけて心身の特徴や変化する経過に応じた援助の特徴を理解できる。

④周手術期・回復期にある対象の機能障害や検査・処置・治療に基本的ニーズの充足の変更を余儀なくされた対象に適した生活を整えることができる。

⑤回復期にある対象が治療により変化した機能障害に適応でき、より最適な生活ができるように生活修正およびセルフケア行動の獲得に向けた援助ができる。

⑥周手術期・回復期にある対象を生活者の観点からとらえ、機能障害に伴う生活の修正・適応並びに Quality of Life が高められるような看護過程の展開ができる。

（2）実習方法

３週間の実習期間のうち、１週目の初日は学内日として、実習直前オリエンテーションにて、事前学習の確認、看護技術演習、実習記録の記載方法を実施する。臨地実習には２日目から開始し、病棟内オリエンテーション、看護師のシャドーイング実習を実施する。３日目に ICU・HCU 実習を実施する。（但し病棟の都合上、３日目に実習できなかった者については、２週目以降に調整する）４日目から３週目まで、周手術期患者を受け持ち看護過程の展開を主とした実習を行う。

Ⅵ. 倫理的配慮

本研究は、共立女子大学・短期大学倫理審査委員会承認（KWU-IRBA#12028）を受けた後、研究対象者には、成績評価後に研究への協力・参加の有無は、自由意思に基づくものであること、また協力を拒否した場合でも、いかなる不利益が生じないこと。結果は、調査以外の目的で用いないことを文書と口頭にて説明した。無記名での学びのレポートは提出をもって同意を得ることを説明した。

Ⅶ. 結果

１）レポート回収率：ICU・HCU 実習 81 名中回収 54 名（回収率 64%）

２）ICU・HCU 実習の学び（表１）

分析の結果、【環境】【感染管理】【安全】【観察】【看護】【チーム連携】【家族】の７つのコアカテゴリ，カテゴリと 40 のサブカテゴリが抽出された。

実習の学びとして、【環境】では、外が見えにくい構造のため、生活の場を意識した環境を作るため、お気に入りの物を飾る工夫をし、患者のストレス緩和に努めていた。また、生活リズムを整えるため、敢えて昼夜の区別がつくよう照明に配慮していた。そして、個人のプライバシーや尊厳を守るためにスクリーン等を用いた工夫をしていた。【感染管理】では、清潔・不潔の徹底化、外部からの感染防止の取り組みがなされていた。また、医療者・面会者の感染予防の遵守や点滴・カテーテルの感染対策が確認できた。【安全】では、不穏時にも患者への説明を丁寧に行い、患者の尊厳を守り、生命を守るための抑制・鎮静が必要な場合があることを知った。また、緊急時に備え、日頃から救急カートや物品の管理と点検を繰り返し行っていた。薬剤では誤認防止に必ずダブルチェックを実施することで未然にミスを防いでいた。【観察】では、患者の些細な変化を見逃さず、表情・言動に注意し、五感を使った観察方法やモニタリングで異常の早期発見に努めていた。【看護】では、回復過程に応じた患者の自立を促す援助の工夫がなされていた。具体的には、文字盤・筆談等を使ったコミュニケーションの工夫や複数のスタッフで患者の体力の消耗を最小限に抑えた効率のよいケアを実践し、リラクゼーションのためにタッチング、マッサージ等個別性のあるケアを提供していた。

【チーム連携】では、患者が最良の医療・看護が受けられるように看護師と他職種（外科医師、麻酔科医、薬剤師、臨床工学技士）がチームとして意見交換し、患者の状態を理解することで連携の重要性がわかった。【家族】では、患者の一番身近な存在として、患者の情報を収集し、不安がある家族にはケアへの参加を促し、間近で患者の状況を確認してもらえる対応の工夫をしていた。

3）ICU・HCU実習後に受け持ち患者に活かせたこと（表2）

患者の疾患、経過に合わせた観察技術、フィジカルアセスメントや看護ケアの実際に役立ったこと。また、環境面では安らげる環境提供や感染予防、転倒転落という視点での整備の重要性と家族との時間を大切に考え、受け持ち患者の看護への実践に役立てていた。

4）ICU・HCU実習が看護観へ影響を及ぼしたこと（表3）

学生は、病棟とは違う特殊環境下におかれても患者を第一に考えるという姿勢や患者の生命を預かる看護師という仕事の責任を感じていた。また短い時間の中で、患者の声に耳を傾け、心に寄り添う看護の大切さを感じていた。

そして、心身不安定である状態の患者への正確な観察とフィジカルアセスメントは回復過程を促進する上で重要な看護技術であり、安全管理・感染予防の知識と確実な看護実践が患者の安全を守ることにつながることを経験から学んでいた。また、どのよ

表1．ICU・HCUで学んだこと

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード	記述されたコード数
環境	患者に配慮した環境調整	プライバシーの配慮	カーテン，スクリーン等を準備し、周囲の視線に配慮していた	21
		室内環境の調整	空調，音量の調整を行い生活環境調整をしていた	15
		生活リズムを整える	室内灯で昼間・夜間の区別をし、一日の生活時間を意識させていた	17
		環境整備	生活の場を意識し、医療器具は整頓し環境整備していた	4
		自宅に近い環境	お気に入りの物（写真・絵）を飾る等工夫していた	14
感染管理	患者・医療者双方を守るための感染管理	スタンダードプリコーション	感染予防行動を意識して取り組んでいた	44
		ガウンテクニック，マスク装着	患者状況により清潔・不潔の徹底化をしていた	38
		ベッド周囲の清潔	感染予防のための環境を整備していた	33
		カテーテルの管理	カテーテル刺入部，ルートの汚染防止を徹底していた	6
安全	患者の安全を守るための看護	器材・医療物品の点検	破損，故障の有無を確認し、緊急時に備えていた	7
		救急カートの点検	緊急時にすぐ使用できる準備を整えていた	4
		柵・ストッパーの確認	転倒・転落防止のために訪室時に確認していた	27
		ミトンの装着	ルート・ドレーンの自己抜去の防止に努めていた	6
		薬剤のダブルチェック	薬剤・患者名の誤認防止に看護師同士で確認していた	22
		緊急時の対応	緊急時の対応準備で部屋，入院キット等の準備をしていた	5
		管理（物的・人的・時間）	治療・看護の滞りを防止するためにミーティングで管理していた	2
		せん妄患者への対応	医師の指示された鎮静薬を使い鎮静を行っていた	6
観察	患者の状態把握のための観察	観察の工夫	五感を使って観察の工夫をしていた	48
		異常の早期発見	身体・精神機能の詳細な観察が行われていた	40
		フィジカルアセスメント	身体・精神機能の評価をしていた	34
		モニタリング	患者の睡眠中もモニタリングで確認していた	18
		ライン類の確認	ルート・ドレーンの管理・確認をダブルチェックで実施していた	22
看護	患者への看護	複数での受け持ち	看護師同士で情報を共有していた	20
		褥瘡予防	安楽な体位と適切な処置で褥瘡を防いでいた	8
		効率よいケア	患者の最低限の体力消耗で済むようケアを行っていた	33
		コミュニケーションの工夫	文字盤・筆談等を使い意志伝達手段の工夫をしていた	22
		疼痛アセスメント	疼痛緩和の工夫（体位・薬剤）を行っていた	29
		清潔ケア	目的に応じた清潔ケア（清拭・陰洗・洗髪・足浴）を行っていた	36
		術後合併症予防	早期離床の援助，口腔ケア，清潔ケアの重要性に気づいた	12
		リラクゼーション	タッチング、マッサージ，アロマテラピーを患者に合わせて行っていた	4
		個別性のある援助	自立（セルフケア）を促す援助を行っていた	9
		リハビリテーション	肺理学療法，離床・歩行訓練を行っていた	7
		精神的な援助	心理面に配慮し患者の気持ちに寄り添う看護を行っていた	12
チーム連携	医療の統一を図るためのチーム連携	術後ミーティング	現在の治療・看護を実践できるための情報共有をしていた	22
		合同カンファレンス	他職種の知識と統合力で患者の回復促進を図るための意見交換	16
家族	患者の一番身近な家族の存在	家族への対応・配慮	患者の状況を伝え、面会を配慮していた	5
		患者の情報収集	入院前の情報収集を行い、看護に活かしていた	8
		患者の希望・価値観の理解	患者のゴールに向けた準備をしていた	2
		家族の不安の緩和	患者の一番身近な存在である家族の気持ちに寄り添う	3
		家族のケア参加を促す	患者の思いや状況を理解してもらうために声かけしていた	3

表２．ICU・HCU 実習後に受け持ち患者の看護に活かせたこと

・観察技術やフィジカルアセスメント方法を実際の受け持ち患者の看護に活かせた
・看護ケアを実践するときに患者の状況に合わせた方法を考え、実施できた
・患者の好きな趣味を教えてもらい、病室に絵を飾ることができた
・患者が少しでも回復促進できるように安らげるケアを考え、実施できた
・早期離床の場面を見学できたので、受け持ちの離床の場面に役立てた
・疼痛緩和のための呼吸法を受け持ちに行い、少し緩和することができた
・環境整備を感染予防と転倒転落という安全面と両方に配慮して行えた
・患者が家族と一緒に時間を共有する大切さを考えられた

表３．ICU・HCU 実習経験が自身の看護観へ影響を及ぼしたこと

・どのような場所においても患者を第一に考える姿勢は変わらないことがわかった
・患者の生命を守るという看護の仕事の責任の重さを痛感した
・「人」として、これまでの生きてきた過程と「個」として尊重していく大切さを痛感した
・患者の声に耳を傾け、心に寄り添う看護の大切さを感じた
・患者の不安定な状態の変化にいち早く気づける観察眼がもてる看護師になりたいと思った
・患者の一番身近な存在である看護師という仕事に魅力を感じた
・チームで協働しているが、カンファレンスでの看護師の言葉は胸に響いた
・将来ICU・HCUの看護師になりたいと思った

うな状況下におかれている患者であっても一人の「人」として、これまでの生活過程や価値観・信念等の「個」として尊重していく大切さを痛感していた。以上のことから、看護師の役割や将来の姿もイメージすることができていた。

Ⅷ．考察

学生は、ICU・HCU 実習では特殊環境下における看護技術と患者を取り巻く環境や個の尊厳の理解について学んでいた。

杉森は、「経験は知覚による客観の認識と規定すると、体験は個々の主観に属し、客観性に乏しく知性による加工、普遍化を経ていない、まさに看護学における実習という授業展開は、体験を経験とする学習場面としてきわめて重要な意味を持つ」[9] と述べている。また、鈴木は「看護基礎教育の段階から学生個々が臨床実践能力を高めていかなければならないと考える。看護実践能力は看護観を基盤に知識、技術、態度を統合されたものである」[10] と述べていることから、臨地実習での体験を経験に変えることや看護実践能力が看護観の基盤となることを鑑みると今回の ICU・HCU 実習での学びを経験に変えていたことや ICU・HCU 実習の看護実践は看護観へ影響を及ぼしていたことが理解できる。

山西は看護観について、「看護観を文字で表現すると、端的には『看護は科学であり、アートである』ということだと考える。前提となる法律や文献、エビデンスに基づいた根拠などを重要視するプロセスをたどること、科学を学ぶ方法や論理的思考により出た結果を結論とする最終的な看護に関する考えを表現した結果をいう」[11] と述べている。このことは、ICU・HCU 実習は、学生にとってテキストでの机上の学習での知識を実際に実習という臨地の場で看護師と一緒に観察やケアを実践したことにより、根拠を理解したことが、受け持ち患者への看護実践に活かすことへとつながったことに相当したと考えられる。これは冨田らが「看護観は机上の学習や書物を読むだけでは身につくものでもないし、また、実習だけしても得られない。両方を同時に必要とする」[12] と述べていることに合致している。

さらに吉村らは「学生ができるだけ（ICU）で体験できる機会を作ることが必要であり、そして体験したことを有効に活用できる指導方法を考えることが必要である。学生が患者の状態をどのようにとらえ、どのように看護していこうと考えているのかを早期にフィードバックさせるとともに、看護師や教員など指導者からのタイムリーな指導が必要と考えられる」[13] と述べている。このことから ICU・HCU 実習の体験を受け持ち患者の看護に活かすためには、日々の学生カンファレンスの時間を使い、その日体験したことを学生がどのように感じ、どのように学んでいたのか、フィードバックできる時間を作ることが重要であり、教員の役割として、学生の思考の整理と学生が感じた感性を大切にし、有効的時間を創出するために意図的なカンファレンスへと導く力が重要であることが再認識できた。

今回 ICU・HCU 実習に関して、全く負の意見が含まれていなかったことから、学生が自己の体験を肯

定できたことが看護観の形成には重要であることが考えられた。川島は「看護観が明確化することによって、看護や学習に意欲や自信がついていく」[14] と述べていることからも今後 ICU・HCU 実習での学びは看護観の形成、ならびにその後の学習に関しても大きく影響を及ぼすことを十分理解し、支援方法を検討していきたいと考える。

Ⅸ．結論

本研究の結果と考察から、今後の課題として以下のことが結論づけられた。

１）ICU・HCU 実習での学びでは、特殊環境下における看護技術と患者を取り巻く環境や個の尊厳の理解に有用という結果が得られた。

２）ICU・HCU 実習での体験を経験に変え、受け持ち患者の看護実践につなげるには、自己の看護を振り返る省察の機会を得られることが重要と考えられた。

３）ICU・HCU 実習を経て、自己の看護を振り返り、自己の体験を肯定できたことが、看護観形成には重要と考えられた。

以上のことから、今後は、ICU・HCU 実習体験後にタイムリーなフィードバックをするための意図的なカンファレンスの開催を心がけ、実習体験を受け持ち患者への看護実践に移行する支援の実施、さらに学生が自己の看護を振り返る機会を設け、看護観形成を促進できるような支援の在り方等教育方法の示唆を得ることができた。

Ⅹ．研究の限界と今後への示唆

本研究では、３年課程の看護短期大学での周手術期実習における ICU・HCU 看護実習体験について明らかにしたものであり、全ての看護教育機関に在籍する学生の現象として一般化するには限界がある。今後他の教育機関とも連携を図り、データ数を増やして、一般化できるようにしていく必要があると考える。

謝辞

本研究にご協力していただきました皆様に心より感謝いたします。

なお本研究は、2016 年度日本看護学会（急性期看護）第 47 回学術集会にて発表したものに一部加筆、修正を加えました。

引用文献

１）厚生労働省：平成 26 年（2014）医療施設（静態・動態）調査・病院報告の概況，Ⅰ医療施設調査，３診療等の状況，（３）特殊診療設備の保有状況
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/14/

２）厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書，（３）効果的な臨地実習の方法，平成 23（2011）年２月 28 日，
http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/...att/２r985200000013l 4 m.pdf

３）河相てる美，中田智子，中井里江：成人看護学実習における ICU での学生の学びの構造，*共創福祉*，10（２）：9-20, 2015.

４）八城恵，飛田昌子：ICU 実習における看護学生の学び，*中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*，9, 205-208, 2014.

５）山本加奈子，佐久間美華：急性期看護実習における ICU 実習の意義－ ICU 実習の経験の有無による実習目標達成度の比較検討，
第 43 回日本看護学会論文集（成人看護Ⅰ），107-110, 2013.

６）宮嶋正子，池田敬子，山本美緒他：急性期看護実習における手術室と ICU 見学実習導入の試み－学生の達成感と記述内容の分析から－，*和歌山県立医科大学保険看護学部紀要*，9, 23-31, 2012.

７）吉村弥須子，白田久美子：周手術期看護実習における看護学生の体験からの学び－ ICU に入室した患者への術後看護の体験－，*大阪市立大学看護学部雑誌*，3, 49-60, 2007.

８）菱刈美和子，石渡智恵美，菊池きよ美：周手術期実習における看護実践力向上を目指した育成方法の検討２－ ICU・HCU 看護実習を体験した学生の看護実践能力の獲得状況と看護技術，学びの分析より－，*第 45 回日本看護学会論文集（急性期看護）*，333-336,2015.

９）杉森みど里，舟島なをみ：*看護教育学*，（６），医学書院，254, 2016.

10）鈴木良子他：看護観と看護実践、看護学校と臨床との連携で看護観を育む，*看護教育*，43（3）：176-182, 2002.

11）山西文子：看護とは科学であり、アートである伊藤暁子先生に教わった「看護観」「看護教育観」：*看護教育*，57（2）：86-87, 2016.

12）冨田幸江，小林たつ子，寺田あゆみ：基礎看護

学臨地実習Ｉで捉えた看護学生の看護観に関する検討－看護観レポートからの分析－，*山梨県立看護大学短期大学部紀要*，（９），No.1,2003.
13）前掲書７）
14）川島みどり：*ともに考える看護論，医学書院*，40,1973.